

与論島の経済的发展への足掛かり

医学部医学科 1 年
4215100435 坂本 望

〔序論〕

鹿児島島の最南端に位置する海で囲まれた小さな島、与論島。「東シナ海の真珠」と謳われる本島は島のいたるところに真っ白なビーチと透明度の高い海が広がっている。戦後から観光業に力を入れ、若者を中心に人気に火が付き、空前の観光ブームが訪れた。ピーク時には年間 15 万人もの旅行客を入れ込む人気観光スポットであったが、海外旅行人口の増加や沖縄の人気の上昇に伴い、与論島は徐々に観光客の数を減らしていくこととなった。

では、その現状を打開し与論島がさらなる経済発展を遂げるために私の考察を述べることにする。

〔本論〕

現在与論島では、新規観光客獲得のために様々な取り組みを行っている。例えば島外での観光 PR イベントの企画や参加を行い島の魅力の周知を図るとともに、島内イベントを開催し、島内にも活気を創りだしている。さらには、「1 島 1 校」を原則とした修学旅行の受け入れなどにも力を入れている。しかしながらその成果は芳しいとは言えず、近年の入込み客数は概ね現状を保ったままとなっている。(図 1)

図 1: 年別入込客の動向

西暦	2010	2011	2012	2013	2014	2015
入込客数	53,628	51,052	50,681	54,097	53,120	60,379
(対前年差)		(▽2,576)	(▽371)	(△3,416)	(▽977)	(△7,259)

(資料) 与論町役場「平成 25 年町勢要覧」

近年、様々なメディアに取り上げられることも多く徐々に知名度を上げてきてはいるものの客足が伸びてこないのが現状である。その原因の一つとして沖縄や奄美諸島との

差別化がとれていないということが考えられる。確かに与論島は綺麗な海と白い砂浜、そしてゆったりとした時間が流れる伝統のある島であるが、それは本島に限らるものではない。隣の沖縄にも同様の特色がみられ、またそこにも伝統ある独特の文化が築かれている。そしてその事実は与論島の魅力を覆い隠すように知れ渡っている。これはつまり与論島の観光戦略を考える上で綺麗な海と独自の文化は伝家の宝刀たりえないということである。そこで必要なのは明確な沖縄や奄美との相違点、つまり差別化なのである。勿論局所的に見れば相互の違いは見てとれるのだが、大局的な視点に立ったとき、これらの島々に対して似たり寄ったりという印象を持ってしまう可能性は大いにある。これこそが与論島における最も大きな課題なのではないだろうか。それを克服するためには、本島の特色を十分に尊重しつつも、他にはない新たな特徴を持たせることが今後の活性化へと繋がる足掛かりとなるだろう。従来、豊かな自然に頼りきった観光産業はすでに沖縄などに大敗を喫している。今こそ時代やニーズに合わせた柔軟な変革が求められている時なのである。与論島独自の「自然+何か」これを打ち上げることに焦点を移すことが重要である。

例えば、大型音楽フェスの誘致を考えてみる。これは毎年多数のイベントがあり、野外ライブなどが多く、1日のみならず数日に渡って夏に開催されるものが多い。さらには一つのイベントに非常に多数の集客が見込める。いくつかの海辺に会場を設営し、観客はその会場を渡り歩くついでに与論島の豊かな自然に目を休めることができるという仕組みである。そして多数の観客により島内での大きな消費活動が期待できる。これはあくまでも一例にすぎずインフラ整備などの問題も山積みだが、この様に自然と一つ目の目玉を組み合わせることにより観光客増大の大きな一歩に繋がるだろう。

〔結論〕

過去には美しい南国の島として観光の大ブームを巻き起こした与論島であるが、現在はその熱も冷め、離島としての大きな岐路に立たされようとしている。それでもこの島には日本屈指の豊かな自然と伝統のある文化が脈々と受け継がれており、その魅力は健在である。しかしながら近隣の島々との間で没個性となってしまう。そこで他島との明確な差別化を果たし、他にはない新たな風を吹かせることで今後の与論島の発展への大きな足掛かりとなるだろう。